2013 年度

海外サマープログラム参加報告書

Vol. 1

お茶の水女子大学

グローバル人材育成推進センター、グローバル教育センター

「海外サマープログラム参加報告書」の発刊にあたって

グローバル教育センター長
森山　新

昨年度、本学はグローバル人材育成推進事業のベスト 11 に選ばれ、内向き志向がささやかれる今日の日本において、グローバル教育の最先頭に立つこととなった。また日本のカリキュラムは世界のそれから外れ、ガラパゴス化状態にあると言っても過言でない。その中で本学はキャンパスのグローバル化のための第一弾として、他大学に先駆け全学で 4 学期制移行を宣言、カリキュラムのガラパゴス化から脱出し、海外への派遣留学と、海外からの受入留学の促進のため挑戦的第一歩を踏み出した。その結果、第 2 学期にあたる 6〜9 月に海外の各種サマープログラムに参加したり、海外の学生が本学のサマープログラムに参加したりすることが容易となった。

今夏はグローバル人材育成推進事業が始まって最初の夏となった。来年度からの 4 学期制導入と本格的サマープログラム参戦に先駆け、学生たちが韓国、台湾、ドイツのサマープログラムに参加した。これまで短期留学の報告書は年に 1 回の発行であったが、サマープログラムの重要性にかんがみ、サマープログラムのための報告書を分離独立させ、発行する運びとなった。その第一号となる本書は、世界各地で開催されるサマープログラムが日本の学生たちをしてどのような学びを与えてくれるのか、我々に教えてくれる点で重要である。

サマープログラムは 2 か月以内の海外派遣であるという点では、その学びは決して多いとは言えないかもしれない。しかしながら若者の内向き志向がささやかれる日本にあって、海外生活の醍醐味を垣間見させてくれる貴重な体験、はじめの一歩となり、将来、交換留学や海外の大学院進学など、より長期の留学への重要なステップとなることが期待できる。

本書は今回のサマープログラムに参加した学生たち 12 名の体験談が掲載されている。本書につづられた学生たちの体験に触れることで、この夏、サマープログラムに参加できなかった学生や、海外留学をすべきか迷っている学生たちが、海外に目を向けるための多大な刺激を与えてくれることと思う。

最後にサマープログラムに参加した学生たちが、この夏の経験を基盤に、グローバルな世界においてさらに羽ばたいてくれることを期待したい。

2013 年 10 月末日

夏が待てないっ!!

2013年　協定校サマープログラム

夏の計画は
お早めに★

	大　学 （コース名）	内　容	期　間	ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙ教育ｾﾝﾀｰへの 申込〆切日＊	宿泊	授業料
韓　国	梨花女子大学校（ソウル） *Ewha International Co-ed Summer College*	・韓国語コース ・レクチャー（英）	セッション１：４週間 ６月25日～７月24日 セッション２：２週間 ８月７日～８月21日	⇒ ５月８日（水） ⇒ ６月25日（火）	あり 自費	無料
	淑明女子大学校（ソウル） *Sookmyung International Summer School*	・韓国語コース ・韓国スポーツ文化コース	セッション１：３週間 ７月１日～７月22日 セッション２：３週間 ８月１日～８月22日	⇒ ４月22日（月） ⇒ ６月23日（日）	あり 無料	無料
	慶北大学校（大邱：テグ） *KNU Global Summer School*	・韓国語コース ・レクチャー（日韓併用） ・文化体験（料理、K-Pop ダンス、韓服など）	２週間 ８月７日～８月21日	５月20日（月）	あり 自費	無料
台　湾	国立台湾大学（台北：タイペイ） *2013 NTU Summer Plus Programs*	・中国語コース ・レクチャー（英） ・文化体験＆ﾌｨｰﾙﾄﾞﾄﾘｯﾌﾟ	セッション１：４週間 ７月１日～７月26日 セッション２：４週間 ８月５日～８月30日	５月24日（金） セッション１・２共通	寮費+授業料+ﾌｨｰﾙﾄﾞﾄﾘｯﾌﾟ全部込みで 2,700 US$	

＊**「ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙ教育ｾﾝﾀｰへの申込〆切日」**はサマーコース開催校の〆切日よりも早いので**ご注意ください！**（これは、授業料が無料になるための早期手続です。）

★「申込費」「教材費」など別途経費がかかる場合があります。詳細は ML 情報、または下記まで！

【お問合せ・お申込は…】グローバル教育センター・奥村三菜子（okumura.minako@ocha.ac.jp）学生センター棟 3 階 307 号室まで、お気軽に♪♪

BERGISCHE UNIVERSITÄT WUPPERTAL

協定校バーギシェ・ブッパタール大学（ドイツ）「環境科学サマースクール」参加者募集！！

2013年9月16日（月）～9月27日（金）

参加説明会：5月24日（金）12:20-13:10　共通講義棟2号館102室

- **サマースクール概要**
  - （1）開催地　：　バーギシェ・ブッパタール大学　（ドイツ、ブッパタール）
  - （2）テーマ　：　Sustainable Chemistry: Primary Renewable Resources
  - （3）派遣期間：　2013年9月16日(月)～9月27日(金)
  - （4）参加費用：　約35万円
    - ・授業料＋寮費（750ユーロ）
    - ・交通費（20～25万円）
    - ・海外旅行保険、食費、活動費等
- **助成金**　8万円（JASSO奨学金申請対象者のみ。事前事後の手続きあり）
- **募集人数**　10名
- **応募資格**
  - （1）2013年度お茶の水女子大学自然科学系の学部3年生以上（博士課程前期を含む）
    （基礎的な化学、物理、生物を2年以上学んだ者）
  - （2）TOEIC 500点（相当）以上の英語能力を有する者。

応募書類・応募方法

下記の応募書類を提出してください。

① 申請書（Wordファイル）　*申請書ファイルの取り寄せは okumura.minako@ocha.ac.jp まで
② お茶大成績証明書のコピー（スキャン）
③ 英語能力証明書（TOEIC, TOEFL, IELTS等の通知書）のコピー（スキャン）

【提出先】　グローバル教育センター（奥村）：　okumura.minako@ocha.ac.jp
メール件名：「環境科学サマースクール申し込み（氏名）」　＊郵送不可

応募書類提出〆切：6月18日（火）17：00　厳守！

＜問合せ先＞　お茶の水女子大学　グローバル教育センター
学生センター棟3階　307号室（奥村三菜子）
Tel: 03-5978-2573
E-mail: okumura.minako@ocha.ac.jp

＜目　次＞

韓国 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

梨花女子大学 サマースクール（韓国・ソウル）

セッション１　　白井　綾乃［学部４年］ ・・・・・・・・・・・・・・・ 2

原田　美緒［学部３年］ ・・・・・・・・・・・・・・・ 4

セッション２　　安井　祐菜［学部１年］ ・・・・・・・・・・・・・・・ 6

淑明女子大学 サマースクール（韓国・ソウル）

セッション２　　三次　好華［学部３年］ ・・・・・・・・・・・・・・・ 8

慶北大学 サマースクール（韓国・大邱:テグ）

永野　友梨［学部１年］ ・・・・・・・・・・・・・・・ 10

台湾 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13

国立台湾大学 サマースクール（台湾・台北:タイペイ）

セッション２　　鈴木　志保［学部１年］ ・・・・・・・・・・・・・・・ 14

藤田　杏奈［学部２年］ ・・・・・・・・・・・・・・・ 16

ドイツ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19

ブッパタール大学 環境科学サマースクール（ドイツ・ブッパタール）

大阿久　紗希［学部３年］ ・・・・・・・・・・・・・・ 20

小山　香梨［学部３年］ ・・・・・・・・・・・・・・・ 22

高田　園子［修士１年］ ・・・・・・・・・・・・・・・ 24

馬場　智子［学部３年］ ・・・・・・・・・・・・・・・ 26

藤井　彩［学部３年］ ・・・・・・・・・・・・・・・ 28

韓　国

梨花女子大学サマースクール
Ewha International Co-ed Summer College
(Ewha Womans University)

淑明女子大学サマースクール
Sookmyung International Summer School
(Sookmyung Women's University)

慶北大学サマースクール
KNU Global Summer School
(Kyungpook National University)

＜梨花女子大学サマースクール　セッション 1＞

「最高に贅沢な 1 か月」

文教育学部　言語文化学科　4 年
白井　綾乃

韓国に興味を持ち始めたのは高校時代、日本でデビューして間もない東方神起に魅了され、彼らの話す言葉や文化をもっと知りたいとずっと思っていました。就職活動を終えて、学生最後の夏休み。韓国で過ごせるラストチャンスと思い参加することにしました。

私が参加した session1 というコースは、期間は 1 か月、大学構内の国際寮に滞在しました。参加学生はシンガポールと香港、そしてアメリカからで大半を占めていました。日本人ばかりでないところが session1 の大きな特徴だと思います。中身はというと、遊びほうけるのも勉強に励むのもその人次第のコースでした。月～木曜は毎日 9:00～11:30 まで自由選択の授業、14:00～16:45 まで午後の韓国語の授業が行われました。適宜休憩がはさまれたので授業時間は苦でなかったし、授業内容は非常に体系的でした。毎週金曜日は自由参加のフィールドワークで韓国民俗村の見学や、キムチ作り体験、北朝鮮との国境付近（DMZ）への 1 日ツアーなど、梨花大の国際交流センター主催のイベントも充実していました。とりわけ Peace Buddy という韓国人のパートナー学生をひとり付けてくれる制度には助けられました。「美味しいものを食べに行く」「伝統芸能を観に行く」「自宅に招待する」など、それぞれの韓国人学生の「もてなし」の気持ちをあたたかく感じました。

午前の授業には「北朝鮮と東アジア」という国際関係学の授業を受講しました。先生は韓国人でしたが使用言語はすべて英語で、参加学生はアメリカ、ノルウェー、香港出身などでした。受講放棄をたびたび真剣に考えるほどハードな授業ではありましたが、この授業での学びはとても大きく、とりわけ脱北者の方に直接話を聞く機会をもてたのはたいへん有意義でした。拉致問題での日本と諸外国の学生の立場の違いが露わになる場面もあり、複雑な気持ちになることもありましたが、普段なかなか知りえない北朝鮮の内外の事情と諸外国の関係を学ぶ良い機会でした。ニュージーランド留学でも経験しなかった、個人プレゼンテーションを 2 回したのも良い挑戦になりました。授業は大変でしたが、決して勉強だけしていたわけではなく、友人たちと観光に出かけたり、カラオケに行ったり、色々な韓国料理を食べに行ったり、舞台を観に行ったり、毎日これ以上ないほど充実していました。

ご存知の通り韓国は日本にとても近い国です。既に訪れた経験もあるので、参加前は楽しむのが目的で、正直たいした新しい発見を期待していませんでした。でも世界各国から来た

学生といるときの「外国人」としての目線と、「日本人」という韓国社会においてある意味で特異な立場の二つから見た韓国は、発見に溢れていました。例として言語の面では、滞在中一番の使用言語は英語でした。アメリカ・台湾・イタリア・デンマークなど国際色豊かな仲間たちと毎日を過ごし、韓国語・英語・日本語の 3 か国語を駆使してコミュニケーションをとる日々。「共通語としての英語」の重要性を、日本のお隣の国でこれほど感じるとは思ってもみませんでした。私を 1 か月あれこれ面倒見てくれた Peace Buddy は大学 1 年生だったのですが、自分が 4 年前これだけ英語でコミュニケーションがとれたとはまったく思えません。日本にいると、加熱する韓国の「学歴社会」を割と冷やかに見ることもありますが、こうして目の当たりにすると国際競争のなかで韓国企業が台頭する理由が垣間見えた気がします。また、K-POP アイドルやコスメ商品、教育サービスなどの「ソフトパワー」を効果的に国家・観光戦略に用いるところは、日本の比ではありません。一般的な観光旅行ではわからない韓国の一面を覗くことができたと思います。1 か月間いたことで、韓国という国を盲目的になりすぎることもなければ無知なまま批判することもなく、じっくり見つめられたと思います。

私は 3 年前にお茶大・同徳女子大学共同の「日韓大学生交流セミナー」に参加したのですが、そこでの友人にも再会することができました。お茶大でかつて交換留学生として勉強した友人たちと遊びに出かけることもできました。新たな出会いを楽しむ一方で旧交をあたためることもでき、この縁をこれからも大切にしていきたいと心から感じます。また、韓国語はまだまだ初級レベルですが、近い将来韓国企業と一緒に働く機会につながるように、これからも勉強を続けていきたいです。

東京にいると個人行動が多くなるため、あれだけ毎日誰かと時間を共有するのは久しぶりでした。今思い出しても楽しくて仕方がない思い出ばかりなのは、素敵な友人に囲まれて日々を過ごせたからで、とても贅沢な時間だったなあと思います。大学生活最後の夏休みにこのコースに参加できて本当によかったですし、卒業旅行にはここでの友人に会いに欧州まで行こうかと考え中です。サマースクールの参加を叶えてくださった奥村先生をはじめとする諸先生方、梨花女子大学のインターナショナルオフィスの先生方、向こうで出会った友人の皆様に感謝いたします。

＜梨花女子大学サマースクール　セッション 1＞

My Precious Memory ~Seoul 2013 Summer~

文教育学部　言語文化学科　3 年
原田　美緒

私の参加した梨花女子大学サマースクール・セッション 1 は、6 月下旬から約 1 か月間のプログラムです。参加者は 200 人強で、アメリカやヨーロッパ、アジア各地等世界各国から集まった、非常に大規模でインターナショナルなものでした。基本的に、英語又は韓国語で行われるアカデミックな授業一つと韓国語の語学クラス、又は前者のアカデミックな授業を二つ受講します。授業は月曜日から木曜日まであり、金曜日には任意参加のフィールドトリップが催されます。これは、韓国民俗村や 38 度線の訪問、遊園地観光や B-Boy パフォーマンス鑑賞等、韓国の歴史や伝統、そして現代文化まで網羅されていました。全体を通して、このサマースクールは勉学・文化体験の両方が充実した、非常に質の良い素晴らしいプログラムでした。

私にとって初めてのアジア、初めての韓国滞在は、毎日が新鮮で、刺激的で、密度の濃いものとなりました。私がこのサマースクールを選んだ理由は主に二つあります。一つ目は、韓国に触れたいと思ったからです。私はサマースクールが始まる直前まで約 9 か月間イギリスのマンチェスターに交換留学していました。留学中に心から尊敬できる韓国人の友人と出会い、彼と関わっていく中で、自分の隣国に対する知識の乏しさを痛感しました。日本と歴史的にも文化的にも様々な共通点がある中、「近くて遠い」国とも言われている韓国。この国のことをもっと知りたい、と遠く離れたヨーロッパの地で感じました。二つ目は、このサマースクールが私の期待する内容を満たしていたからです。他のものに比べて期間が 1 か月と長く、更に韓国語や文化体験だけではなく英語で現地の大学の授業を受講できたこと、また期間が 6 月後半からのスタートで日本はまだ学期中であるため、日本人が少ないことが予想できた点、交換留学は 6 月上旬に終わるため、良いタイミングであったこと等が決め手となりました。

私は午前中「International Relations of North Korea with East Asian Countries」という英語で開講の授業、午後に韓国語の語学の授業を受講していました。前者についてですが、日本の視点からではなく、別の国から見た北朝鮮について、また客観的な視点からの日本と北朝鮮について知りたいと思い受講しました。又日本の在日朝鮮人の友達、イギリスで出会った中国のコリアンマイノリティの友達

との対話の中で、自分の「朝鮮」に対する興味が膨らんでいくのも感じていました。授業では、北朝鮮と東北アジア（中国・日本・韓国）やロシア、アメリカとの歴史的な国際関係や各国間の国際問題、食糧不足・難民等の北朝鮮の国内問題等を学びました。授業課題はプレゼンテーション 2 回とそのどちらか一つをまとめて考察したペーパー一つ、さらに期末試験と、平日はもちろんのこと休日も予習復習に費やさなければならないという想像以上にハードなものでしたが、その分やりがいもありました。授業の最後には北朝鮮難民の方々と交流する機会が設けられ、生の声を聴くことができ、大変貴重な経験となりました。

授業がハードだったとは言ってもあいまをぬってソウル観光もしていました。私がこのサマースクールに参加した目的の一つが「韓国に触れること、韓国を知ること」だったので、韓国人の友達に明洞や仁寺洞等、ソウル市内を案内してもらいました。中でも印象的だったのは、韓国において義務である軍隊の生活を紹介した展示会場で、実際に兵役を経験した男友達に詳細に解説してもらったことです。軍隊といえば武器を持って訓練をするという印象が先行しがちですが、実際は料理をひたすら作る役や上官のテニスの相手をする役等様々で、そういった見えない役割もあって軍は成り立っているのだと感じました。

又このプログラムに参加している学生とも授業やフィールドトリップ等で交流する機会がたくさんあり、今でも連絡を取り続けている友達もいます。イギリスではヨーロッパやインド系、アフリカ系の学生が多かったのですが、今回はアメリカやシンガポール、香港からの学生が多く、交換留学での生活とはまた違った交流が持て、視野が広がっていくのを感じました。

このサマースクールに参加して、韓国の文化や人に触れることができ、よりそれらについて知りたいという思いが強くなりました。言語と文化は密接に結びついているので、今、少しずつですが韓国人の友達に協力してもらって韓国語の勉強を続けています。又学術的な知識を深めるために、大学外部の「韓国学」の授業を受講しています。将来どのような形であろうとも韓国に携わりたいとも考えています。短期目標として、学術的な知識を深めつつ自分で語学を勉強して、就職活動が終わった後にもう一度韓国に訪問したいです。

私がこのサマースクールに参加した目的は、「韓国に触れること、北朝鮮学の授業を受けること、韓国語を少しでも習得すること」でしたが、目的が違えばまた違った生活になると思います。このプログラムは全て英語で行われ、世界各国からの学生が集まっているので、韓国が好き、という人だけではなく、英語を上達させたい、国際交流をしたいと考えている人も満足できる内容です。冒頭で述べたように、梨花女子大学校サマースクールは綿密に作られた、大変質の良いプログラムです。お茶大の皆さんにはぜひ参加することをおすすめします。

＜梨花女子大学サマースクール　セッション 1＞

「もう悔しい思いはしたくない！」

文教育学部　言語文化学科　1 年
安井　祐菜

私は 8 月 6 日から 8 月 22 日の 2 週間、梨花女子大学のサマースクールに参加してきました。留学も、一人で海外へ行くのも初めてで、英語力も不安しかなく、やる気と勢いだけを頼りに臨んだこの激動の 2 週間はどんな内容で、自分にとってどのような意味をもったのか。簡易ではありますが書いていこうと思います。

まずこのサマースクールの 2 週間、午前中は毎日韓国語の授業を受けました。私は韓国語を学ぶのが初めてだったので、ハングルの書き方、読み方から始めるビギナーのクラスでした。二人の先生が交互に私たちのクラスに来てくれましたが、二人とも若い女性の先生で、フレンドリーでとても楽しそうに授業をしていたのが印象的でした。また、14 人程のクラスに日本人は 2 人しかおらず、アメリカ、イギリス、シンガポール、中国、ドイツ、フランス…と本当にさまざまな国の人がひとつのクラスで同じ授業を受けていました。それぞれの見た目も、それぞれの母国語も本当にバラバラだけど、みんなが同じようにハングルの難しさに苦しんだり、単語クイズを出し合ったり、カタコトの韓国語であいさつしたりする様子は、ただ素直に、“みんな同じなんだ”と思わせてくれるものでした。

午前中の韓国語の授業が終わった後も、午後の授業がありました。午後は、大きな教室で、セッションに参加している生徒全員が同じ講義を受けます。外国人の韓国の言語への適応について、映画や韓流ブームなどの話題を絡めた韓国の文化、日本や北朝鮮との関係にも深く触れた内容の韓国の歴史、韓国の伝統音楽など、もともと韓国という国に興味があった私にとっては、本当に面白い内容の講義ばかりでした。さらに私の闘志を燃えさせたのは、その講義がすべて英語で行われたということです。韓国語の授業も英語で行われましたが、実際使われるのは短いフレーズだけで、長い文章を英語で聞くわけではないので、その午後の講義が私にとっては初めての体験でした。もちろんすべての文章を理解することはできませんでした。教授が発した言葉に対して周りのみんなが笑っていても、どうして笑っているのかわからなかったり、質疑応答の時間に、中国人の学生が積極的に流暢な英語で発言していたり、英語のレジュメの日本語訳版だけが日本人のために用意されていたり…。悔しい、取り残されていると思うことが何度も何度もありました。日本語ではなく英語のレジュメを貰ったり、必死にメモをとったりしましたが、発言をしたり質問したりすることはできませんでした。

そしてその午後の講義の後には Field Trip という校外学習のようなものがあり、博物館や歴史記念館に行ったり、映画館に映画を見に行ったり、キムチ作り体験をしたりなどとにかく盛りだくさんの内容でした。バスで現地に向かい、現地から大学の寮までの帰り道は各自のタイミングで自由に帰る、という流れだったので、帰りに友達と買い物に寄り道して、夜ご飯を食べて帰ってくるというのが日常でした。

私はこの 2 週間を通して何を一番に思い知らされたかというと、英語を話せない辛さ、そして恥ずかしさでした。もしも周りの参加者たちがみな英語のネイティブスピーカーというのならまだ仕方がないことかもしれません。しかし今回のサマースクールには、梨花女子大学に通う韓国の学生をはじめ、中国などのアジア圏やドイツ・フランスなどのヨーロッパ圏など、英語ではない母国語を持つ様々な国からの学生たちが集っていました。彼らの多くは自分の母国語があるにもかかわらず、英語を話すことに慣れていない私とは大違いのように見えました。英語のネイティブスピーカーに囲まれても話の流れを途切れさせることなく、自然に会話の中に入っている様子が印象的でした。日本人の参加者が多いこともあって、やはり日本人は日本人で固まる傾向がありましたが、日本人と一緒にいては日本語を話してしまい、このめったにない機会を無駄にしてしまうことはわかっていました。私は寮のルームメイトがアメリカ人の子だったということもあって、彼女にお願いしてネイティブスピーカーたちの食事やお出かけに連れてってもらったりして、英語を話さなければならないという状況を積極的に作りました。しかし自分が英語を話す以前に、ただでさえどんどん進んでいってしまう会話の中での、ネイティブスピーカーの速い英語を聞き取ることさえできませんでした。この状況に耐えなければいけないんだと頭ではわかっているけれど、孤独感そして何よりも自分が何もできない悔しさ、恥ずかしさのあまり逃げるように日本人の空間に身を置いてしまう自分がいました。

このような葛藤を繰り返した 2 週間を終えてもちろん、悔しいし、辛かったのは本当です。でも、そんな気持ちを抱いたのは本当に一瞬だけでした。それ以上に強く私が感じているのは、次こそはこんな思いをしたくない、また必ずリベンジしてやる！！！！！！という思いです。梨花女子大学という韓国の女子大で一番と言われるような伝統と実力のある大学で世界中の優秀な学生と出会い、話をし、共に学ぶことができたことは自分にとって誇りになる経験となりました。でも私にとってこのサマースクールが持った意味はそれだけではありませんでした。英語という言語は、一つの言語でしかないけれど、私と世界中の人を繋いでくれるこの上なく重要なツールであることを身をもって実感でき、またそれを全くもって自由自在に扱うことができない自分の現状に気づかされ、私の目標である長期留学への思いをより熱くさせてくれるものでした。

このサマースクールに参加する機会を与えてくれたお茶の水女子大学、そしてその背中を押してくれた奥村先生に心から感謝します。

＜淑明女子大学サマースクール　セッション 2＞

「ソウルでの三週間を通して」

文教育学部　言語文化学科　3 年
三次　好華

私がこのサマースクールに参加した理由は、交換留学生として韓国に行く前に韓国語を勉強し、韓国での生活に慣れるためでした。サマースクール前の私の韓国語のレベルはハングル文字をすべて読めるかも怪しいぐらいでした。韓国語の基礎づくりだけでなく、テコンドーをはじめとした韓国文化理解のためのアクティビティーが充実した 3 週間の淑明女子大学サマースクールを選びました。

淑明での生活は毎日朝 9 時から 12 時まで韓国語の授業を受け、午後 1 時から 3 時までテコンドーの授業を受けるというかなりハードなものでした。授業が始まった直後は体力的に厳しいかなとも思いましたが、韓国語の先生もテコンドーの先生もとても尊敬できる優しい先生で、なにより教え方や、やる気の出させ方に熟練されていたので、ハードなスケジュールにもクラス全員最後までついていけました。

クラスは 10 人程度と少数だったのですぐに仲良くなり、私は文字から始める初歩のクラスを受講しましたが、もっとレベルの高い人は語学堂（語学学校）の授業をとることができ、それぞれのレベルにあった勉強ができます。テコンドーのクラスは選択制でとってない人も数人いましたが、この短期間に青帯までとれるので少しでも関心があるならばぜひとってもらいたいです。これらの基本授業のほかにも、K-pop の教室や韓国料理の調理実習、民俗村へのフィールドトリップやナンタ鑑賞など、毎週新鮮なイベントがあり、休む暇なく韓国を楽しめました！

また、寮生活もこのサマースクールの楽しさの一つです。寮は大学まで 5 分、そしてなによりソウル駅から徒歩で行けるほど近かったのでとても交通の便がよかったです。クラスメイトは全員寮に住んでおり、いつも集まって話したり、ご飯を食べに行ったりしていたので、3 週間以上一緒にいたような気がするほど、親密になりました。日本のカレーをつくったり、韓国語の劇の練習をしたりなど、思い出がたくさん詰まった寮です。

さらに、淑明女子大は留学生サポートのためのバディーグループもしっかりしており、問題や質問があればサマースクール前からバディーに聞くことができました。歓迎会やハン川沿いでピクニック、おいしいケーキ屋さん、そしてフェアウェルパーティー。あげたらきりがないほどいろんな場所に行きました。私たちの韓国での生活はバディーたちのおかげで快適に、過ごせました。バディーは学期中に 5 人ほどの担当学生を受け持つのですが、サマー

スクールでは 1 人に 1 人ついてしっかりサポートしてくれます。今でもそのバディーたちとはよく遊びに行く仲で、ついに新しいバディーについての相談にのったりするようになりました。

現在も私は韓国の梨花女子大学で勉強しています。こちらでの新学期が初めから問題なくはじめられたのはこのサマースクールのおかげです。サマースクールに参加する前は、お茶大からは私のみの参加で韓国語もまったくわからないという状況だったので正直不安でした。しかし、ルームメイトをはじめとするクラスメイトやバディーと時間を共有することでその不安はすぐに消え去りました。そして初めての国での生活にも慣れることができました。今ではサマースクールが恋しくてしかたないという話をルームメイトとするほどです。

韓国には領土問題や半日感情についての報道で怖いイメージや不安が大きかったのですが、カナダ・フランス・ドイツ・クウェート・中国・香港・台湾、そして韓国と様々な国からいろいろな背景のある友達は、文化という枠組みを通してみるのではなく人とのふれあいからその人の背景に触れて膨らましていくほうが面白いことを私に教えてくれました。韓国の人は本当に優しいです。そしてとても明るいです。それはこちらで生活をして初めて気づけたことでした。

サマースクール自体が少人数で、大学の国際課や寮の事務、そしてバディーや先生の手厚い充実したサポートのおかげで、忘れられない今までで一番得るもののあった夏休みを過ごすことができました。この経験を活かして、淑明でできた友達たちの活躍に負けないくらい、いろんな挑戦をしていきたいです。

＜慶北大学サマースクール＞

「近くて遠い国、韓国」

文教育学部　言語文化学科　1 年
永野　友梨

(1) サマースクールの内容

慶北大学のサマースクールは、平日は、午前中は韓国語の授業、午後からは文化体験という形でした。午前中の授業では、日本人の先生が韓国語をハングルの書き方・読み方から文法・語彙まで丁寧に教えてくださいました。この授業の一環として、韓国の高校生との交流授業があり、高校生との会話自体は英語でしたが、現地の教育や韓国の高校生などをみることができたのはとてもいい経験だったように思います。また、午後からの文化体験では、韓服の着付けや韓紙を使ったうちわの製作、陶芸、料理教室、バリスタ体験、テコンドー教室など、本当に毎日盛りだくさんな内容でした。さらに、土曜日は大邱（テグ）市内のハーブ園やウォーターパークに行きました。日曜日は基本的に休みになっていましたが、グループを作って、大邱から比較的近い歴史文化都市・慶州に行き、世界遺産の石窟庵や仏国寺など多くの歴史的遺産を観光しました。

(2) サマースクールに参加する前と後の変化

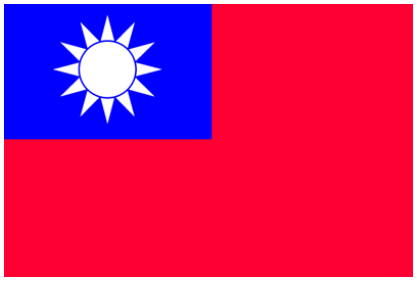
韓国はよく、「近くて遠い国」と形容されます。これは本当にそのとおりで、国境は隣り合っているものの、互いに歴史認識の違いによるマイナスの印象が根強く残っているように思われます。もっとも、サマースクールに参加する前の私自身も、近年の韓流・K-POP ブームから領土問題を発端とした日韓関係の悪化など、韓国に対してのイメージは肯定的なものと否定的なものが頭の中に混在している状態でした。それでも、実際に現地の人と話してみて、韓国には日本に興味を持っている人は多く、すごく親切にしてくれる人もたくさんいたように感じました。ずっと行動を共にしたバディの中にも、「日本に留学したい」「日本で就職したい」という人は多かったし、交流授業を行った高校でも、「日本のファッションに興味がある」「日本のアニメが大好き」と言ってくれる学生もいました。サマースクールに参加する以前は、ただ韓国に行ってみたい、韓国語を話せるようになりたい、韓国についていろいろ知りたい、というような漠然な考えしか持っていませんでしたが、このような経験を通して、韓国という国やそこで暮らす人々について、もっと多く、歴史・言語・文化・環境などいろいろな観点からこの国を見てみたい・考えてみたいと感じました。そして、日本と韓国、日本と世界につい

てさまざまな視点や考えを持って、韓国と日本が「遠い」理由や「近く」なるためには何が必要か、考えていきたいと強く思いました。

(3) 今後への抱負

今回のサマースクールでの経験は、さきに述べたように、韓国に対するよりいっそうの興味を抱かせるものであった上に、自分自身にとって、様々な新しいことに挑戦するきっかけになったように思います。自分の意志で韓国に行くと決め、両親や先生方の手を借りながらも、ほとんどの準備を一人でしたことで、もっと遠くへ、もっといろんな場所へという欲が出てきました。今後、自分の行ったことのないさまざまな場所に行って、その経験で得た新しい視点をこれからの生活や進路に役立てていけたらと思います。また、「海外」や「外国人」というものに対して以前までは高い壁を感じていましたが、今回の経験でそのイメージをかなり払拭できたように思うので、これからは、それらに対しもっと積極的なアプローチをしていくよう心掛けたいです。

台　湾



国立台湾大学サマースクール
NTU Summer Plus Programs
(National Taiwan University)

＜国立台湾大学サマースクール　セッション 2＞

台湾の「おもてなし」

生活科学部　食物栄養学科　1 年
鈴木　志保

私がこの国立台湾大学のサマープログラムに参加した目的は中国語スキルの向上だった。もともと中国語が好きだったのだが、大学では授業を取らなかったので少しでも語学力を維持、向上しようと思い参加した。周りには 1 年時に留学は早いと言われた（実際参加者の中で 1 年だったのは 30 人中 2 人だった）が、私の所属する食物栄養学科は学年が上がるにつれ忙しくなると聞いていたので今回参加した。このプログラムを通じて、目標であった中国語スキルの向上も達成できたが、もうひとついいことがあった。それは、台湾の人々の「おもてなし」を受けられたことだ。このサマープログラムの成功には、国立台湾大学そして NTU スタッフが大きく貢献していると思う。NTU スタッフとは国立台湾大学の生徒で、このプログラムのために半日あるいは全日おそらくアルバイトで参加者の世話をしてくれたのだが、本当に親切にしてもらった。

オプショナルクラスで作った sachet（香り袋）

サマープログラムの内容はというと、午後は毎日（土日除く）3 時間みっちり中国語の勉強。レベル別に 5 つのクラスに分かれていて、レベルに沿った 2 冊の教科書をもとに国立台湾大学の教師が授業を行った。最終日にはプレゼンテーションがあり、グループ全員での劇や 2、3 人で軽いコントや着物の説明など、思い思いに中国語で発表した。午前中は毎週火曜日に台湾の文化についての授業（英語）、その他計 4 回のオプショナルクラスが NTU スタッフ主催で開かれる（任意参加）。その他授業の後に寺院や博物館などの散策があり、台湾の様々な観光名所を巡ることができた。大きなイベントとしては郊外に一泊する two-day trip や出し物を披露する culture night というのがあった。

次に台湾という異国の地で 1 か月暮らしてよかったところを二つ挙げる。

一つ目に最初のほうでも書いたが､1 か月を通して台湾人の優しさに触れることができた。NTU スタッフは時間外になってもつきっきりで中国語を教えてくれ、困ったことがあった時には一生懸命付き合ってくれた。ほかにもサプライズとしてケーキを用意するなど culture night や two-day trip といったイベントの準備も丹念に行われていて､私たちは本気で楽しむことができた。一般の台湾人も親切な人が多く、スーパーの店員さんも言葉がわからない私にもにこやかに応対してくれた。日本でも今「おもてなし」という言葉が流行しているが、台湾では日本以上の心からの「おもてなし」を受けることができた。

二つ目は自分でたくさんの事に挑戦することで、もっと頑張らないといけないなと思えたことだ。例えば、外国人の参加者には中国語と英語を交えて会話をしたが、どちらもまだまだなので緊張して疲れてしまった。茶道部でもないのに茶道をしたり、何となく日本らしいと思い落語をしたり、なかなかに無理をしたがその分もっと日本について知らなければ外国人と堂々と交流できないことも実感した。このような経験は日本ではまずできないだろう。自分がやらなくてもうまい人がたくさんいるのだから。

私はこのサマープログラムで台湾、そして日本を再発見できた。私たち外国人からしか見えない台湾人のいいところはたくさんあるし、日本人でも日本の知らない部分はたくさんある。これからもイベントや交流会などに積極的に参加して、自分の知らない世界へとまた踏み出したい。

南国フルーツのたくさん載ったかき氷｡因みに台湾にはおいしいものがたくさんあるので食いしん坊さんにもお勧めである。

＜国立台湾大学サマースクール　セッション 2＞

「台湾にて」

文教育学部　人文科学科　2 年
藤田　杏奈

高校の英語の成績は下から数えたほうが早く、TOEIC の成績は見るのが怖くて取りにすら行かなかったこの私が、海外研修に参加するなど高校時代の英語の恩師が聞いたら数秒フリーズしてしまうのではないか、というほど、私にとって無謀な挑戦でありました。

実際無謀で、空港について早々ワタワタして果たしてこれから私は生きていけるのかと、初日にして不安しか覚えませんでした。

しかし、どっこい生きていけるんですね。これが何よりもの学びだったと思います。

台湾大学のサマープログラムは英語の講義を聴くものが週に約一回、それから平日は毎日中国語の授業があります。初心者から上級者までレベルは細かく分けてもらえるので安心して受けられます。私は下から数えて二番目のクラスでした。といっても、下二つのクラスについてはドングリの背比べです。

その他台北周辺を泊まりがけで旅行したり、授業のあとに観光したりと、そんなプログラムもありました。すべてに台湾大学の学生さんがついてきてくれて、どこに行っても安心です。

土日は基本的に自由で、友達と台湾観光する人たちが多かったです。私は台湾の歴史を勉強したかったので、一人で博物館を梯子することが多かったのですが……

午前中が何もない日もたくさんあったので、そういうときも博物館を梯子しました。国立歴史博物館、国軍博物館、国立博物館、郵便博物館、タイヤル民族博物館、民族博物館、故宮博物館、植物園など。本屋さん巡りもして、面白そうな本をたくさん入手できました。帰りの飛行機の重量制限が大変でした。

本は全部繁体字の中国語ですが、意味は何となく掴めますし、正確に知りたいものについてはその都度人に聞くなど勉強するので、中国語学習のモチベーションに繋がります。

台湾に一か月いたわけですから、生活は日本人と話す以外は英語と中国語です。前述の通り、語学の苦手な私にとっては無謀きわまりない挑戦です。

しかし、日本人はもちろんのこと、様々な国からの参加者の温かさに助けられ、何とか生きていくことが出来ました。助けられながら、自分もきっと成長したのだと思います。その集大成として、最終日空港に行くタクシーでトラブルが起きても、拙い中国語と英語と運転手さんの優しさで、無事飛行機に乗ることが出来ました。七月の私では不可能だったと思います。

日本に帰ってからも実感することがあって、バイト先のドラッグストアに筑波大学の留学生さんが来ても、英語で雑談しつつ接客ができるようになりました。これまで筆談だったこ

とと比べると大きな進歩です。

ただ、反省点はたくさんあります。大きなものとしては、やはり英語は必要だなと思いました。まず、言われたことをうまく聞き取れない、次に、瞬時に言いたいことを英語に出来ない。この点はこれから重要な課題になっていくと思います。

私の夢は地方公務員ですが、今はどこでも外国の方と仕事をする機会があります。そんな時、拙い英語でも仲良くはなれますが、それは決してビジネスとしては通用しません。英語だけではなく第二外国語の中国語、第三外国語のロシア語も、とりあえずではなく、生きていく武器として、これからも鍛えていきたいと思います。

ド イ ツ

ブッパタール大学 環境科学サマースクール

International Summer School

Sustainable Chemistry:Primary Renewable Resouces

(University of Wuppertal)

＜ブッパタール大学　環境科学サマースクール＞

「サマースクールでの体験」

理学部　化学科　3 年
大阿久 紗希

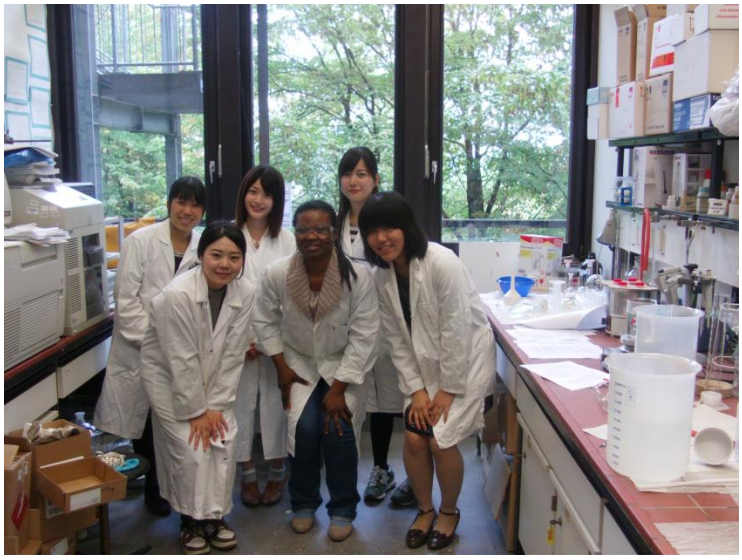
この 2 週間のサマースクールでは、今までで 1 番と言ってもいいほど密度の濃い充実した時間を過ごすことができました。自分の専門分野である化学に深く関係する環境科学についての実習はもちろん、周りのドイツ人学生や先生方や街の人々との交流は私にとってとても貴重で実りある体験となりました。私は海外留学の経験がなく、1 週間以上海外に滞在することも今までになかったので、行く前はドイツでの文化の違いや言語の不自由さに不安を覚えていました。しかし、実際に行ってみると周りのドイツ人学生や先生方のあたたかさや気遣いのおかげで、滞在してからすぐに不安は解消することができました。英語での交流は、文法などを細かく気にしなくても相手に伝えようという意思があれば、ぎこちない英語でも十分に伝わることがわかりました。しかし、英語で会話している際に、言いたいことが英語でどうしても言えなかったり相手が伝えようとしていることがなかなか理解できないというもどかしさを何度も経験して、自分の英語力の不十分さを思い知らされました。英語という言語は世界中の多くの国で共通して通用するので、他の国の人々との交流には英語を使えるということが必要不可欠で大事なことだとわかり、今後は英語をもっと学習しようという意欲が高まりました。しかし、今回の実習期間中にドイツ人学生や先生方と常に英語でコミュニケーションをとっていたために、実習前と比べて確実に英語を使う力が身に付いたと感じています。

日本とは全く文化の異なるドイツ人との交流はとても楽しく、新しい発見も多くあり、貴重な経験となりました。その国での“当たり前”は他の国では通じないことの方が多いということも知りました。このような交流を通じて、ドイツ人にはドイツ人の良さがたくさんあり、日本人には日本人の良さがたくさんあるということを改めて感じることができました。

サマースクールの実習の内容としては、私は化学科なので理解しやすい部分が多くありましたが、化学科の授業では学んだことのない環境科学という分野を扱っていた実習だったので新しく知ることが多くとても興味深かったです。実習中は講義だけでなく課外実習や実験なども多く、実際に目で見て学ぶことができました。持続可能な化学ということで、油脂化学の基礎や工業的製法についての知識、また、バイオマスをどのような方法で利用するか、ということについて様々なことを学びました。木の成分であるリグニンやセルロースなどの原料を利用して化学工業やエネルギー工業に役立てることは、持続可能な産業を営む上で非常に重要であることを知りました。また、化学工業において製品が生産される過程には多くの化学反応があり、私が化学科での授業で今まで学んできた簡単な化学反応が大きく関わっていることがわかりました。私は今まで化学の基礎しか学んでいなかったので、工業というもっと大きなスケールでの化学を考えることはとても新鮮で、化学の研究がどのように貢献しているかを少し知ることができました。環境を保全することは現在の産業社会においてかなり重要なことであり、その基本となる知識を多く学ぶことができて良かったです。

将来自分も化学の研究者として少しでも貢献したいと思うきっかけとなりました。ドイツは環境先進国というだけあり、環境科学の研究が活発なだけではなく日常生活でも環境に配慮している部分をいくつか発見することができました。例えば、スーパーマーケットなどではビニール袋は有料であり、瓶やペットボトルには Pfand システム（デポジット）がありました。また、自転車利用者が多く自転車専用通路も見かけたりしました。このような環境配慮の積み重ねがドイツをきれいな国にしていることを知りました。

この 2 週間のサマースクールを通じて、異文化交流という貴重な体験と今まで学んだことのなかった環境科学についての知識を得ることができ、自分の視野を広げることができたと思います。本当に参加して良かったと思います。



＜ブッパタール大学　環境科学サマースクール＞

「ドイツでの貴重な体験」

理学部　生物学科　３年
小山　香梨

(1) サマースクールの内容

今回のサマースクールでは、Renewable Resources（再生可能資源）について、様々な観点から学びました。まず sustainability（持続可能性）の重要性について考えることから始まり、現在までの歴史を振り返り、私たちの生活を支えてきた資源の移り変わりと現状が抱える課題について見ていきました。人類が利用してきた主要な資源は、木材から石炭へ、そして石油へと移り変わってきましたが、現在私たちが利用している石油資源はあと 40～45 年で枯渇するだろうとされています。そのため石油に代わる、新たな資源を見つけ出すことが早急に求められています。しかし石油や石炭と同じように枯渇する恐れのある資源では、また数年後に同じ状況に陥ってしまいます。そのため持続可能な再生可能資源を見つけだし、それを確立させることが求められている、ということを学びました。そして現在新たな資源として期待されているものにどんなものがあるか、またそれらのエネルギー源、化合物合成の原料としての潜在能力や利点および課題は何かについて学習しました。今回はその中でも植物由来の油分や植物の構成成分であるセルロースやリグニンに焦点を当て、それらの性質および利用法について習いました。教室での講義だけでなく、森で採取したキノコからリグニン分解酵素を抽出する実験や、sunflower oil からエステル交換反応によってバイオディーゼルを作る実験、麻からセルロースを抽出する実験、またキャノーラ油からハンドクリームを作る実験なども行い、それらを通して植物資源の具体的な利用法について体感しました。また大学近くの有機農園の見学にも行きました。さらに休みの日や放課後の時間を利用してブッパタール近郊の観光にも連れて行って頂き、ドイツ文化を堪能しながら、再生可能資源について多角的に学ぶことができ、とても充実した 2 週間になりました。

(2) サマースクールに参加する前と後の変化

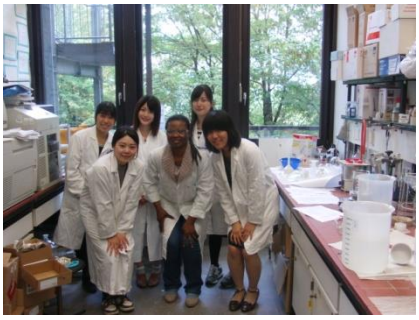
私は現在、新エネルギー源として注目されているオイル産生藻類に関する研究に関わっており、エネルギー源になりうる植物に関しては知っていましたが、それらは同時に Renewable Raw Materials（再生可能原料）としての利用可能性も秘めているということに関しては知りませんでした。植物の合成する糖類や油分は、高分子合成の出発物質にもなりうるということを学び、植物の持つ豊かな潜在能力について再認識しました。また今回の研修を通して多様な側面から再生可能資源について考えたことにより、新たな発見が沢山ありました。私は今まで再生可能資源となる作物の持つ負の側面については考えたことがありませんでした。しかし今回の講義の中で、食糧となる作物を資源利用のために育てる際には、食糧不足の問題が関わってくることや、資源作物の大量栽培は森林破壊、生物多様性の減少、モノカルチ

ャーの進行等につながる恐れがあること、また石油のように特定の地域でしか産出されない資源に頼っていると、世界情勢の変化によって打撃を受けやすいこと等を知り、次世代資源について考える際には常に社会的側面について考える必要があるのだということに気付きました。資源となりうる植物は数多く存在するので、今後は単一の作物に依存せず、それぞれの土地に合った作物を選んでエネルギーを生産できるようになっていけたら良いのではないかと思いました。そのためには作物それぞれの持つ長所を生かし、短所をカバーできるような利用の仕方が研究される必要があると感じました。

また今回日本を離れてドイツで 2 週間生活し、両国間の違いを体感する中で新たに感じたことがいくつかあります。一つ目は環境政策についてです。ドイツではほとんどのお店で袋は有料であり、エコバックを持参するという習慣が市民の中に浸透していました。またペットボトルや瓶については pfand というデポジット制度が適用されていて、リサイクルに出すといくらかお金が返ってくる仕組みになっていました。このような制度を日本においても適用すれば、資源の無駄を減らし、リサイクル率の向上を実現できるのではないかと思いました。二つ目は生活形態についてです。ドイツでは平日は飲食店を除いてほとんどのお店が 20 時までに閉店するのが一般的で、日曜日は大抵のお店が休みになっていました。そのため一人一人が自分の時間を確保しやすく、ワークライフバランスが尊重されている社会だなと感じました。そんなドイツと比べると、日本では便利さを追究しすぎた結果、人間らしい生活がどんどん損なわれていっているのではないかと感じました。日本の社会も、便利さよりも一人一人の生活を尊重する風潮になっていけば、より良い社会が実現できるのではないかなと思いました。

(3) 今後への抱負

今回日本とは異なる環境で勉強したことにより、新たな知見が得られ、考え方の視野が広がりました。国によって、ある一つのことに対する観点やそれにまつわる背景や技術、現状は異なるので、普段とは異なる環境で様々なバックグラウンドを持つ人と関わり合いながら勉強することの意義は大変大きいものであると感じました。そのため、将来留学してみたいという気持ちがより強くなりました。留学するにはまず、語学力が一番に必要となってくるので、今後も語学力の向上に努めたいと思います。また今回の研修を経て、再生可能資源に対する関心が強くなり、今後この分野に関わる研究がしたいと思うようになりました。この研修中に学んだことを大切にし、今後自分が研究生活を送っていく上で生かしていきたいです。



実験室にて

観光で訪れたケルン大聖堂からの眺め（ライン川）

＜ブッパタール大学　環境科学サマースクール＞

「環境大国ドイツでの経験」

人間文化創成科学研究科　ライフサイエンス専攻　修士 1 年
高田　園子

(1) サマースクールの内容

サマースクールではガイダンス、授業、実験、課外活動を行い、最終日にはその成果として修了証を受け取りました。授業では、有機化学の基礎的な内容から現在使用されている触媒の応用まで幅広く学びました。その他には石油化学の歴史や実験で扱ったリグニンの構造等について学びました。実験では、サンフラワーオイルから油のみを抽出する実験や、ハンドクリームの作成、キノコの培養等を行いました。課外活動では、NPO として活動しており、農薬を使わずにコンポストで農作物を育て、そこで育てたものをウシや豚のエサとし、そこからとれる牛乳などを販売して経営を行っているオーガニックファームに見学に行きました。また、他のキャンパスに行き、土壌について学ぶなど課外活動も多く行われました。

(2) サマースクールに参加する前と後の変化

今回の研修では、環境大国と呼ばれるドイツならではの取り組みを知りたいと思い参加しました。ドイツに着き、最初に驚いたことは緑が多いことです。比較的大きい都市であっても、高い建物はそれほど多くなく、電車に乗ればすぐ緑が広がる景色が見えました。空気は澄んでおり、東京のような忙しさも感じられませんでした。このことは日本、とりわけ東京との大きな違いであり、おそらく研究をするにあたっても工場を建設するにあたっても、ドイツと日本を分けて考えなければならない点のひとつではないかと思いました。次に驚いたことはレジ袋の完全有料化と PFAND システムと呼ばれるペットボトルの回収制度です。PFAND システムは、購入したペットボトルに一定の金額が課されており、その後ペットボトルを返す時にその分のお金が返ってくるものでした。環境大国と呼ばれる理由のひとつだと思いました。PFAND システムはそのまま日本に適用できるかは分かりませんが、レジ袋有料化については現在日本においても普及しつつある制度です。ドイツのスーパーでは、有料の袋は 0.1 ユーロと少々高いですが、何度も使えるような大きさとデザイン、しっかりとした質でした。私はこの点はとても良いと思います。授業や実験からも多くの環境に対する取り組みを学びましたが、以上のような実生活からも多くの環境への取り組みを学びました。ドイツの環境問題への対応に更なる関心をもつようになりました。

(3) 今後への抱負

授業や実験からは学問的な知識を、教授やブッパタール大学の学生との交流では優しさと自分らしさをもつ大切さを学びました。また、研修先では多くの留学生が大学院生および研究者として研究をしており、世界で活躍する研究者になるための環境が整っていると感じました。様々なバックグラウンドをもつ人が集まる場所では、多くの考えを共有し合え、新たなものを生み出す機会を増やしてくれると思います。今後は、多くの人と関わることのできる職業につきたいと思うようになりました。

写真 1 大学からの景色

緑や教会が多くとてもきれいな街でした

写真 2 牧場での様子

オーガニックファームに大変興味をもちました

＜ブッパタール大学　環境科学サマースクール＞

「いつかもう 1 度ドイツに帰りたい！」

理学部　物理学科　3 年
馬場　智子

(1) サマースクールの内容

・持続可能なエネルギーについて
　その歴史と今日、将来における必要性
・油脂化学
　油脂化学についての基礎知識の講義、実験
・化学産業における新しい供給原料であるリグニン
　基礎講義および実験
・産業用の原材料の資源について
・界面活性剤
　基礎講義および実験

また、日々の講義や実験以外にも授業の一環でオーガニックの野菜や家畜を育てている農場を訪問して農場主の方に話を聞いたり、化学科の教授何名かと晩御飯を食べに行ったりしました。また、休日はブッパタール大学の学生が企画してくれたツアーでライン川下りをしたり､1 番お世話になったメルケン先生という化学科の教授にはケルンに連れて行ってもらい、そこでケルン大聖堂やチョコレートミュージアムを回ったりしてとても充実した日々を過ごしました。

教授達との夕食

(2) サマースクールに参加する前後での変化

最初は勉強面についてです。私は今まで大学の短期留学プログラムでモナシュ大学とマンチェスター大学にそれぞれ 5 週間行ったことがありました。そのため、今回の研修で英語の授業を受けるということに対しては特に心配していませんでした。しかし、実際に参加してみると化学科の教授による英語の授業は化学の専門的な単語がたくさんでてきて、今までの短期研修で受けていた英語の文法や英会話の授業とは全く異なっていました。さらに、自分の専攻は物理ということと、元々高校の時から化学が得意では無かったので授業を理解することはすごく難しかったです。このサマースクールに参加してみて、海外留学して自分の専門の授業を英語で受けるとことがいかに大変かということを実感することができました。理系となるとさらに専門的な単語がたくさん出てくるので、ただ留学して授業を受けるだけでは何も学べないということが分かりました。

2 つ目は生活面でのことです。私が初めて海外に行ったのは大学 1 年の夏休みに行ったナダです。その時に英語を話せるようになりたいと実感し、それから大学の 5 週間の短期留学に 2 回参加しました。それ以外でも旅行で様々な国に行き、今回のサマースクールも含めると大学に入ってから 11 か国に行ったことになります。しかし、今まで行った海外は大学の語

学研修やツアーがほとんどだったため自分でいろいろなものを手配するということはあまりありませんでした。今回は研修参加者の中の 4 人でサマースクールが始まる前にドイツに行き、オランダ、ベルギーを観光することにしていました。そのため、航空券を自分で手配したり、ホテルを予約したり、ユーレールという鉄道パスを使ってオランダ、ベルギー、ドイツ内を鉄道で移動したりと自分の力だけで現地で旅行したので、このことがすごく自信になりました。

(3) 今後の抱負

海外に行くと毎回自分の英語力の無さを実感します。先生や学生にこういうことを聞きたいと思っても毎回頭の中でこれで文法は合ってるかなと何度も考えてから話すことしかできず、間違えることを恐れてしまいます。また、私は英語を話すことに 1 番必要なものは英単語をたくさん知っていることだと思っているのですが、今は知っている英単語が少ないため言いたいことも言えないのです。そこで、今後は間違いを恐れずに思い切って話していけるようにすることと、自分が使える英単語を増やすことを今後の自分の課題にしようと思います。また、学部を卒業した後は大学院に進学したいと考えているので、大学院で長期の留学をする機会があればぜひ留学したいです。

(4) サマースクールを終えての感想

今回の旅行では現地の人の温かさに何度も触れました。よく、海外では無愛想な人が多いと聞きますが、今回行ったか 3 か国ではそのような印象をほとんど受けませんでした。こちらが何か聞くと、ほとんどの人が丁寧に答えてくれたり、駅の階段でスーツケースを上げるのを手伝ってくれる人がいたり、お店でこちらが挨拶をすると店員さんも笑顔で挨拶を返してくれたりしました。さらに、ブッパタール大学の教授や学生もとても親切で、私たちをプライベートでもご飯に誘ってくれたり、観光に連れて行ってくれたりしました。今回すごくお世話になったメルケン先生が来年日本に来たいと言っていたので、日本に来た際は精一杯のおもてなしをしたいと思います。また、日本に来ている外国の人にもこれからは思いやりを持って接したいです。

最後に、今回のサマースクールを通して感じたことはドイツがとても好きになったということです。ドイツの料理は美味しく、人も優しいし、私達がいたブッパタールは物価がとても安く住みやすいと感じました。今回の滞在ではブッパタール、ケルン、フランクフルト、デュッセルドルフと限られた街にしか行くことができなかったので、いつか必ずドイツにもう 1 度行ってミュンヘンやベルリンなど他の街も旅行したいです。

オランダの風車村
ザーンセ・スカンス

＜ブッパタール大学　環境科学サマースクール＞

「新しい視点」

理学部　化学科　3 年
藤井　彩

(1) サマースクールの内容

持続可能エネルギーやオレオケミカル、産業原料、界面活性剤、触媒作用、再生可能資源などの講義を受け、それに関係する実験を行ったり、土地を訪れたりと、様々な角度から環境科学について考えることのできるサマースクールでした。

実験では抽出や NMR、アガープレートでの培養なども行いました。

(2) サマースクールに参加する前と後の変化

サマースクールに参加することで、コミュニケーションツールとしての英語の重要性を強く感じるようになりました。また、大学でのシステムの違いから、社会人を経験した上で大学院に進んでいる人が多く、勉強に対する熱意も日本と違うものを感じました。これからは何事にもより積極的に取り組んでいきたいと思います。また、再生可能エネルギーの重要性や化学という分野の可能性をグローバルな場で感じることができ、その化学技術が日本だけでなく世界でどう活用されているのか、どういった役割を担っているのかをより広い視野で考えることの大切さを学ぶことができました。

(3) 今後への抱負

もっと色々な国について知りたい、様々な国の人と関わりたい、という気持ちが強くなったため、将来世界と関わることのできる仕事に就きたいと考えるようになりました。就職活動において、海外に展開している、またはしようとしているかどうかも一つのポイントとして企業を調べていきたいと思いました。

編集後記

2013 年は、本当に、本当に、暑い夏だった。
その暑さに負けずに日本を飛び出した学生たちは韓国、台湾のサマースクールへ。一方、日本の残暑から逃れられたと思ったら、逆に寒さに震えてしまったドイツの環境科学サマースクール。一言で「夏」と言っても地球は広く、気候はさまざまである。その気候と同じように、世界には実にさまざまな文化、ことば、ルール、価値観……があり、そこで暮らす人々は一人ひとりが「ユニークな」存在である。
この夏、日本から飛び出し、海外のサマースクールに参加したお茶の水女子大学生は 12 名。この報告書は、その 12 名一人ひとりの、もう二度と戻ってこない 2013 年夏の「ユニークな」夏の体験の記録である。

奥村三菜子（グローバル人材育成推進センター）

海外サマープログラム参加報告書　Vol.1

2013 年 11 月 30 日発行
発　　行　　お茶の水女子大学
グローバル人材育成推進センター、グローバル教育センター
〒112-8610　東京都文京区大塚 2－1－1
Tel: 03-5978-5913
編　　集　　森山新、奥村三菜子
印刷・製本　　大学生協プリント・オン・デマンドセンター